PARALYMPIC GAMES

SYDNEY 2000

Japan Swimming Team

JAPAN SWIMMING FEDERATION FOR THE DISABLED

シドニー大会概要

1　名　　称　　２０００年シドニーパラリンピック競技大会
Sydney 2000 Paralympic Games

2　期　　間　　開 会 式　２０００年１０月１８日
閉 会 式　２０００年１０月２９日
競技期間　２０００年１０月１９日～２９日

3　開 催 地　　オーストラリア　シドニー市

4　主　　催　　国際パラリンピック委員会（ International Paralympic Commttee ）
シドニーパラリンピック組織委員会

5　実施競技　　１８競技（＊日本選手団の出場競技）

競　技　名	対　象　な　ど
＊アーチェリー	車椅子使用者、立位肢体不自由者
＊陸上競技	肢体不自由者、視覚障害者、知的障害者
＊バスケットボール	車椅子使用者、知的障害者
ボッチャ	車椅子使用の重度脳性麻痺者
＊自転車	肢体不自由者と脳性麻痺者（２輪、３輪） 視覚障害者のタンデム
＊乗馬	肢体不自由者
＊フェンシング	車椅子使用者
サッカー	脳性麻痺者（７人制）
＊テニス	車椅子使用者
＊柔道	視覚障害者
＊パワーリフテイング	肢体不自由者
車椅子ラグビー	頚髄損傷者
＊セーリング(ヨット)	肢体不自由者
＊射撃	肢体不自由者
＊競泳	肢体不自由者、視覚障害者、知的障害者
＊卓球	肢体不自由者、知的障害者
＊バレーボール	肢体不自由者（立位、座位）
ゴールボール	視覚障害者

6　参加者数　　１２３ケ国・地域（個人参加の東ティモールはＩＰＣ選手団として参加）
６，１３９人　　選手３，８２４人　役員　２，３１５人

7　日本選手団　１）参加人数　　２４０人　選手１５１人　役員８９人
出場１４競技
２）成　　績　　金メダル１３　銀メダル１７　銅メダル１１　計４１

8　大会の特徴　　１）史上最高の参加国・地域
２）セーリング、車椅子ラグビーが正式競技として実施
３）知的障害者の競技の増加（陸上競技、競泳、バスケットボール、卓球）
４）オリンピックと同様の大会運営と観客
５）ボランティアが支えた大会
６）日本選手団は過去最高のメダル獲得
７）日本で大きく報道された（過去最高の取材）

9　日本選手団成績

競技名	参加数		成績					備考
	選手	種目	金	銀	銅	入賞	他	
アーチェリー	8	10	0	0	1	6	3	
陸上競技	38	71	2	10	5	33	21	世界新記録1
自転車	5	14	1	1	0	6	6	世界新記録1
乗馬	3	6	0	0	0	1	5	
フェンシング	1	2	0	0	0	0	2	
テニス	4	6	0	0	0	3	3	
柔道	5	5	1	0	2	2	0	
パワーリフテイング	1	1	0	0	0	0	1	
セーリング(ヨット)	5	2	0	0	0	0	2	
射撃	4	6	0	0	0	0	6	
競泳	17	60	9	5	1	20	25	世界新記録7　パラ新記録2
卓球	12	15	0	1	1	9	4	
車椅子バスケットボール	24	1	0	0	1	0	1	女子3位
IDバスケットボール	12	1	0	0	0	1	0	
バレーボール	12	1	0	0	0	0	1	
合計	151	202	13	17	11	81	80	

10　大会のメッセージ

Performance, Power & Pride

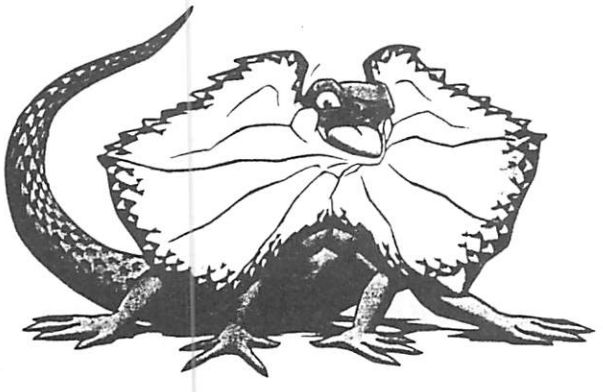
パーフォーマンス　　力　　誇

11　シンボルマーク

「突破」をコンセプトにデザインされた。飛躍、勝利、新しい時代に向かって前進を続ける人間像、そしてシドニーのランドマークとなっているオペラハウスをイメージしている。そして3色は、美しいシドニーをとりまく自然環境を表し、赤は暖かい大地、緑は森のみずみずしさ、青はシドニー湾の豊かな海を意味している。

12　マスコット「リジー」

オーストラリアを代表する動物のエリマキトカゲ。
自分より巨大な敵にもエリマキを広げて立ち向い、決してあきらめない。



PARALYMPIC GAMES SYDNEY 2000 TM ©

13　水泳チーム日程

１０月１１日	東京集合の監督、コーチ、一部選手
１２日	集合　東京、大阪に分かれ集合　東京は結団式　大阪は結成式
１３日	日本出発（夜成田及び関西新空港発）
１４日	オーストラリア着　午前　入国、入村手続き 午後　選手村入村、部屋チェック、ミーティング
１５日 ～１９日	練習　１日２回（１８日は開会式ために午前中のみ練習） 会場　メインプール、サブプール、公共プール 日本チームは４コース割り当て　毎日のミーティング
２０日 ～２８日	午前　７時００分　朝食後、バス乗り場集合 １０分　プール到着、更衣 ２０分　各自ストレッチ　チューブトレーニング 各自予選前の練習 大会本部申請（タッパー、リレーオーダー、介助者） スポーツマサージ
	午前　９時００分　予選開始 レース前の練習 コーチサポート 召集所付添い、入退水介護、タッピング レース後の取材 レース後のクールダウン ジャパンクラブとの連絡｛昼食（おにぎりなど）の引取り｝
	午前１１時００分　予選終了　選手村へ　昼食 ～正午　状況を見て選手を早く村に帰す
	午後　３時００分　バス乗り場集合 １０分　プール到着更衣 ２０分　各自ストレッチ　チューブトレーニング 各自決勝前の練習 大会本部申請（タッパー、リレーオーダー、介助者） スポーツマサージ
	午後　５時　決勝開始 レース前の練習 コーチサポート 召集所付添い、入退水介護、タッピング レース後の取材 表彰 レース後のクールダウン ドーピング検査（成田選手３回） 取材（記者会見など）
	午後　７時　決勝終了　選手村へ　夕食 ～８時　状況を見て選手を早く村に帰す 日本選手団本部に連絡
	午後１０時　チームミーティング コーチミーティング　スポーツマサージ
	競技のない選手については適宜練習、休養などはコーチと相談し決定。
２９日	午前中フリー　となり町へショッピング　夜閉会式
３０日	１日フリー　お世話になったジャパンクラブの方と一緒に、午後シドニー市内ショッピングと感謝の食事会（夜）
３１日	午後ホテルに移動　夜解団式
１１月　１日	早朝オーストラリア発　夜成田、関西新空港到着、解散

シドニーパラリンピック成績一覧

氏　名	クラス	種　　目	記録 予選	記録 決勝	順位	参加数	備　考(１位記録)
河合　純一	Ｓ　１１	５０ｍ自由形	２７．０１	２６．３７	１位	１７	パラリンピック新記録
		１００ｍ自由形	１：０２．４５	１：００．８９	２位	１６	１：００．３２
		１００ｍ背泳ぎ	１：１１．４４	１：０９．９５	２位	１０	１：０９．４０
	ＳＭ１１	２００個人メドレー	２：３７．８５	２：３２．６９	２位	９	２：３０．２９
中條　泰治	Ｓ　１２	１００ｍ背泳ぎ	１：１６．５８	１：１５．３７	８位	１０	１：０３．９８
		１００ｍバタフライ	１：１１．５７		１３位	１４	１：０１．８３
		２００個人メドレー	２：４８．２９		１２位	１２	２：２６．５１
	ＳＢ１２	１００ｍ平泳ぎ	１：２０．５８	１：２１．１１	８位	１１	１：１０．０６
杉田好士郎	Ｓ　１２	５０ｍ自由形	２７．７７		１６位	２５	２５．７９
		１００ｍ自由形	１：０３．６３		２２位	２５	５７．３５
		４００ｍ自由形	５：３９．６７		９位	９	４：２７．７０
	ＳＢ１２	１００ｍ平泳ぎ	１：１９．８３	１：２０．１９	７位	１１	１：１０．０６
酒井　善和	Ｓ　１２	５０ｍ自由形	２６．９８	２６．８２	６位	２５	２５．７９
		１００ｍ自由形	５８．１０	５７．７１	２位	２５	５７．３５
		４００ｍ自由形	４：４９．３５	４：３４．５１	４位	９	４：２７．７０
		１００ｍ背泳ぎ	１：０５．９６	１：０３．９８	１位	１０	世界新記録
		１００バタフライ	１：０３．９２	１：０３．０６	３位	１４	１：０１．８３
陳　　豊春	Ｓ　１２	５０ｍ自由形	２７．６８		１４位	２５	２５．７９
		１００ｍ自由形	１：００．９９		１５位	２５	５７．３５
		１００バタフライ	１：０５．０３	１：０５．３３	４位	１４	１：０１．８３
成田真由美	Ｓ　　４	５０ｍ自由形	４０．６４	３９．２３	１位	１３	世界新記録
		１００ｍ自由形	１：３６．２７	１：３０．０６	１位	１２	世界新記録
		２００ｍ自由形	３：１６．７７	３：１２．７９	１位	９	世界新記録
		５０背泳ぎ	５０．９２	５０．３８	１位	１１	パラリンピック新記録
	ＳＢ　３	５０ｍ平泳ぎ	１：０２．０２	１：０１．９９	２位	９	５８．１２
	ＳＭ　４	１５０個人メドレー	２：５７．３１	２：５３．７３	１位	１２	世界新記録
梶原　紀子	Ｓ　　５	５０ｍ自由形	５２．５４		１２位	１３	３６．８５
	ＳＢ　５	１００ｍ平泳ぎ	２：０３．９５	２：０５．５６	８位	１２	SB4では2位　1:47.15
加藤　作子	Ｓ　　５	５０ｍ自由形	５０．７１		１０位	１３	３６．８５
		１００ｍ自由形	キケン				１：１８．９９
		２００ｍ自由形	３：５６．１０		９位	９	２：４４．６１
藤田多佳子	Ｓ　　５	５０ｍ自由形	５４．４２		１３位	１３	３６．８５
		１００ｍ自由形	１：４７．５２	１：５１．２９	８位	１０	１：１８．９９
		２００ｍ自由形	３：４４．５６	３：４０．３０	８位	９	２：４４．６１
奈良恵理加	Ｓ　　６	５０ｍ自由形	キケン			１４	３６．０２
		１００ｍ自由形	１：２７．０１	１：２３．６７	４位	１４	１：１９．７２
		４００ｍ自由形		６：２８．１４	６位	８	６：１９．１３
		１００ｍ背泳ぎ	キケン			１０	１：３４．７３
		５０ｍバタフライ	５５：３８		１０位	１３	３９．１３
井上　八郎	Ｓ　　３	５０ｍ自由形	５６．４９	５６．６０	４位	１３	５０．１９
		１００ｍ自由形	２：０３．０９	２：０２．７０	４位	１３	１：５４．１４
		２００ｍ自由形		４：２２．０６	４位	８	４：１６．８７
		５０ｍ背泳ぎ		１：１４．４９	８位	８	５２．７２
軽部　　弘	Ｓ　　５	５０ｍ自由形	４２．２６		１４位	２３	３４．４７
		１００ｍ自由形	１：２９．７５	１：２９．５３	７位	１４	１：１７．９４
		２００ｍ自由形	３：２０．０４	３：２０．１１	７位	１０	２：４９．９１
	ＳＢ　３	５０ｍ平泳ぎ	５６．５４	５８．２４	５位	１２	５２．８７
	ＳＭ　４	１５０個人メドレー	３：０２．２９	３：０９．５２	８位	１１	２：３７．９４
浜村　敏弘	Ｓ　　５	５０ｍバタフライ	失　　格			１７	４１．１３
	ＳＢ　４	１００ｍ平泳ぎ	２：０４．７９		１０位	１３	１：３７．３７
前田　大介	Ｓ　　６	５０ｍ自由形	３５．４９		１１位	２０	３２．１３
		１００ｍ自由形	１：１６．９２		１０位	２１	１：０８．１０
		４００ｍ自由形	６：０６．５９		１１位	１１	５：２１．５０
		５０ｍバタフライ	３８．８８		９位	１４	３４．０１
		１００ｍ背泳ぎ	１：３２．２１		９位	１１	１：１８．１４
細川　　宏	Ｓ　　７	５０ｍ自由形	３２．５９		１３位	１７	２８．５８
		１００ｍ自由形	１：１１．７４		１４位	１６	１：０３．３６
		１００ｍ背泳ぎ	１：２４．６４		９位	１９	１：１６．０９
宮本　　圭	ＳＢ　７	１００ｍ平泳ぎ	１：４７．８７		９位	１１	１：２５．１３
荒　　力	ＳＢ　８	１００ｍ平泳ぎ	１：２５．０５	１：２３．９４	８位	１６	１：１７．９４
本村　洋介	Ｓ　　９	１００ｍ背泳ぎ	１：１２．５７		１０位	１４	１：０５．１５
男子４００ｍＭリレー（酒井、中條、河合、杉田）				４：３１．２６	１位	６	世界新記録
女子２００ｍリレー　（奈良、加藤、藤田、成田）				３：０１．３１	１位	７	世界新記録
男子２００ｍリレー　（井上、軽部、浜村、細川）				３：０７．８０	７位	８	２：２４．４２
男子２００ｍＭリレー（本村、軽部、浜村、井上）			３：２６．９８		１０位	１２	２：３９．９４
男子４００ｍリレー　（本村、荒 、前田、細川）			４：５６．４７		１０位	１１	４：０６．８５
男子４００ｍＭリレー（本村、荒 、前田、細川）			５：３４．０５		１１位	１２	４：３２．３９

パラリンピックの概要

1　パラリンピックの歴史

１９４４年から、イギリス、ロンドン郊外のエイルズベリー市にあるストーク・マンデビル病院の脊髄損傷センターで第二時世界大戦で負傷した兵士たちに、次のような原則で集中的に治療を始めたL.Guttmann博士は、筋神経システムのスポーツによるトレーニング効果やレクリエーションとして、パンチボール、ダート、ロープクライミング、スキットルやスヌーカーを試みた。

> 1　苦痛と早期死亡の原因となる褥瘡や尿路感染からの敗血症は、治療方法が充分認識されれば、完全に阻止できる。
> 2　神経筋システムの再適応力及び代償能力を引出し、高めることによって、余命を伸ばし、自信や社会性を強化することができる。
> 3　外科や内科といった不統一な専門分野の治療から、脊髄損傷の複雑な問題を、多面的に取り扱うことで総合管理はできる。

この脊髄損傷センターで治療を受けた人たちは、受傷から就業まで６．５ケ月、そして、その８５％は有給で就職した。これは、医学的リハビリテーションの手段として、スポーツを取り入れ、その成果が大きかったことが大きな要素としてあげられている。

その後、競技として車椅子によるポロ競技を取り入れられたが、ポロ競技の代わりに車椅子バスケットボーが採用された。また、アーチェリーと卓球も紹介され、日常の生活の中に、スポーツがたいへん重要な位置を占めるようになってきた。

１９４８年7月２８日、これは、オリンピックロンドン大会が開催された日である。この同じ日に、ストーク・マンデビルで初めてスポーツフェスティバルが開催され、１６人(男子１４、女子２)の車椅子の選手が参加した。その後、このフェスティバルは毎年開催され、種目も参加者も次第に増え、1952年には、オランダのチームも参加し、１３０名によって競技が行われた。これが第１回国際ストークマンデビル競技大会であり、毎年7月、ストーク・マンデビルにある競技場（ L.Guttmann Sports Center for the Disabled ）で競技大会が開催されている。第３６回大会から名称を「World Stoke Mndeville Wheelchair Games」と呼ぶことになった。

１９６０年のオリンピックローマ大会の年から、ぜひ、オリンピックの年には、その開催地で実施しようとのL.Guttmann博士らの願いから、１９６０年ローマ、１９６４年東京、１９６８年は高地のため、ラマットガン（イスラエル）、１９７２年はハイデルベルグ(西ドイツ)で開催された。L.Guttmann博士はこの脊髄損傷者のみのこの大会に、その他の身体障害者が参加できるように新たにスポーツ組織（国際障害者スポーツ機構）を設立した。１９７６年のトロント(カナダ)大会には視覚障害、切断とポリオの３つの障害が加えられた。１９８０年はソビエトで開催が困難であるということからアーヘン（オランダ）で脳性麻痺とその他の機能障害が加えらえ開催された。１９８４年は、アメリカのイリノイ州（ ISMGF ）とニューヨーク州（ IBSA、CP-ISRA、ISOD ）の２ケ所行われる予定であったが、半年前になって、イリノイ州での実施が困難となり、ＩＳＭＧＦ関係の大会はストーク・マンデビルに会場を移して開催された。１９８８年はソウル(韓国)で、第３７回ＩＳＭＧを兼ねた第８回ＰＡＬＡＬＹＭＰＩＣが開催され、初めて、一般のオリンピック大会会場を使用した。この年初めて、ソビエトが参加した。

１９８９年に国際パラリンピック委員会（ＩＰＣ）が発足し、１９６０年のローマで開催された国際障害者スポーツ大会をパラリンピック第１回大会として数えるようになった。ＩＰＣが発足したことで、今までの医学的なクラス分けが機能的クラス分けに変わり、より競技性が高まり、エリートスポーツによる競技会となった。１９９２年のバルセロナ（スペイン）大会は、バルセロナオリンピックの組織委員会がパラリンピックを運営した。この年からオリンピック招致にはオリンピックとパラリンピックがセットとして考えられるようになった。１９９２年には同じスペインのマドリッドでＩＰＣ傘下に加入した知的障害者のパラリンピックが初めて開催された。１９９６年のアトランタパラリンピックでは身体障害者に加え知的障害者の一部種目が実施された。２０００年のシドニーパラリンピックではＩＰＣの競技部門すべてに知的障害者の競技が実施された。２０００年のシドニーパラリンピックでは、知的障害者のバスケットボール競技でスペインチームに健常者が参加していたこともあり、知的障害者のクラス分けの方法が確立されていないことで、２０００年２月にＩＰＣより資格の一時停止措置が取られている。

2　パラリンピック夏期大会の開催状況

回	開催年月日	開催地	参加			ISMWSF	ISOD	CP-ISRA	IBSA	INAS-FID	日本の成績			特記事項
			国	選手	日本						金	銀	銅	
1	1960 9.18 ~ 25	イタリア ローマ	23	400	0	○					0	0	0	日本参加せず
2	1964 11. 8 ~ 14	日　本 東　京	22	567	84	○					1	5	4	
3	1968 11. 3 ~ 13	イスラエル テルアビブ	29	1047	63 (6)	○					2 (1)	2	9 (2)	
4	1972 8. 2 ~ 10	西ドイツ ハイデルベルグ	41	1346	62 (3)	○					4	5	3	
5	1976 8. 3 ~ 11	カナダ トロント	40	1000	82 (5)	○	○				11	9	5	切断者・視覚障害者加わる
6	1980 6.21 ~7.5	オランダ アーヘン	42	2556	61 (3)	○	○				9	11	7	脳性麻痺者加わる
7	1984 6.16 ~ 30	米　国 ニューヨーク	45	1800	38 (4)		○	○	○		3	2	5 (2)	I.C.C.が関わる 機能障害者が加わる
	7.21 ~8.1	イギリス エイルズベリー	40	600	55 (1)	○					6	5	2	下肢障害者のみ
8	1988 10.15 ~ 24	韓　国 ソウル	61	4220	210 (37)	○	○	○	○		16	12	17 (2)	
9	1992 9. 3 ~ 10	スペイン バルセロナ	83	4200	125 (10)	○	○	○	○		8	7 (2)	15 (4)	1989年IPC設立
10	1996 8.16 ~ 25	米　国 アトランタ	103	3196	123 (7)	○	○	○	○	○	14 (5)	10 (3)	13 (4)	知的障害者(水泳陸上) 一部参加
11	2000 10.18 ~ 29	豪　州 シドニー	123	3824	151 (17)	○	○	○	○	○	13 (9)	17 (5)	11 (1)	知的障害者参加
12	2004 ~	ギリシャ アテネ												

（　　）は水泳選手関係

3　パラリンピックの意味

１９６４年に開催された「東京パラリンピック」は世界ストーク・マンデビル競技会として開催され、その愛称の「パラリンピック」は、パラプレジア オリンピック（ Paraplegia Olympics ）、すなわち、下半身麻痺者のオリンピックという意味であった。しかし、１９８９年に組織された国際パラリンピック委員会（ International Paralympic Committee ）のパラリンピックは Ｐａｒａ Ｏｌｙｍｐｉｃ（もうひとつのオリンピック）という意味で使われている。このＩＰＣは従来のパラリンピックを運営してきたＩＣＣ〔国際調整員会〕〔 CISS, ISMWSF, ISOD, CP-ISRA, IBSA, INAS-FID(国際知的障害者スポーツ協会 1986成立) で組織〕に代わり、この６つの組織と各国の代表などによって組織され、バルセロナパラリンピック以後のパラリンピック等を主催いている。しかし、ＣＩＳＳ（聴覚障害者のスポーツ団体）は１９９５年に脱退した。１９９１年にはＩＰＣ傘下にINAS-FIDが加わったことで、知的障害者だけの第１回パラリンピックがスペインのマドリッドで開催された。続いて第２回目の大会となるアトランタパラリンピックでは、他の障害と共に開催され、知的障害者は、陸上競技、水泳競技のそれぞれ２種目だけの実施となりった。シドニー大会では陸上競技、水泳、バスケットボール、卓球の４競技が実施された。

シドニーパラリンピック報告書

監督　　中森　邦男

1　選手選考と成績

1）選手選考

今回の代表選手選考にあたり、日本身体障害者水泳連盟はパラリンピック大会で優秀な成績をあげるために、一昨年より強化指定選手制度を設けて選手の強化合宿を実施した。また、昨年度は国際ランキングの対象となるオーストラリアで開催されたサザンクロス大会に参加し、多くの選手がランキングの上位に位置付けされるようになった。その結果、水泳選手のパラリンピック参加枠は１７名（ワイルドカード２名を含む）となった。

当水泳連盟は、障害者スポーツ支援基金による海外派遣や強化練習の成果を出すことと、国の予算によるパラリンピック参加を考えると、選手の代表はメダルの獲得が第一で、次に８位入賞できることが重要であると考え、次の選考基準を設け選手選考した。

選考基準　金メダル及びメダル候補者（個人競技及びリレー）
　　８位入賞候補者（個人競技及びリレー）

2）成績

結果的にメダル獲得数は１５となり、前回のアトランタ大会を上回ることができた。また、メダル獲得者以外の入賞者も６名で、１７名の選手のうち１４名が入賞、その他２名が自己の記録を更新する結果となった。全員入賞の目標から入賞できなかった選手３名がでたことは残念であったが、他の参加国の大幅な競技力の向上を考えると、水泳チームの結果は満足できるものと評価したい。

特に、国別対抗であるリレー種目の女子２００ｍリレー(20ﾎﾟｲﾝﾄ)、男子４００ｍメドレーリレー「視覚障害」で優勝できたことは、日本の水泳競技力向上を裏付けるものとして大いに評価したい。結果、１７名中８名の金メダリストが誕生したことは大きな喜びである。

メダルの獲得　金メダル９　銀メダル５　銅メダル１
メダリスト　　金メダル　８人
新記録　　世界新記録　７　　パラリンピック新記録　２
入賞者　　６人（メダリスト以外）

選考順位と成績

１位	成田真由美（川崎市）	金メダル６(ﾘﾚｰ1)	銀メダル１
２位	河合　純一（静岡県）	金メダル２(ﾘﾚｰ1)	銀メダル３
３位	酒井　善和（神戸市）	金メダル２(ﾘﾚｰ1)	銀メダル１　銅メダル１
４位	梶原　紀子（福岡市）	８位入賞	
５位	井上　八郎（埼玉県）	４位入賞	
６位	中條　泰治（東京都）	金メダル１(ﾘﾚｰ1)	
７位	杉田好士郎（千葉市）	金メダル１(ﾘﾚｰ1)	ワイルドカード該当者
８位	加藤　作子（兵庫県）	金メダル１(ﾘﾚｰ1)	
９位	奈良恵里加（群馬県）	金メダル１(ﾘﾚｰ1)	
１０位	藤田多佳子（神戸市）	金メダル１(ﾘﾚｰ1)	
１１位	荒　　力（大分県）	８位入賞	
１２位	軽部　　弘（茨城県）	５位入賞	
１３位	前田　大介（長野県）	自己ベスト	
１４位	細川　宏史（三重県）	７位入賞(ﾘﾚｰ)	
１５位	本村　洋介（埼玉県）	自己ベスト	
１６位	浜村　敏弘（島根県）	７位入賞(ﾘﾚｰ)	
１７位	宮本　　圭（大阪府）	予選落ち	ワイルドカード該当者

2　コーチ体制

1）コーチ編成について

推薦選手１７名の内、介護をほとんど必要としない者は４名で、その他、視覚障害者（４名）の生活介護、タッピング、脳性麻痺者（３名）の入退水や移動の補助（介助）、心身のケア、車椅子使用者（６名）の入退水や移動の補助（介助）などの理由に加えて、トレーナー、通訳ができるコーチを考え、７名のコーチ体制でパラリンピックにあたった。しかし、終わってみると当初から考えられた上記内容のほか、メダリストに対する報道への対応、体調を崩した選手のケアー、４回開催された会議への出席、アクシデントなど予想外の出来事に対し７名のコーチで約２０日間、ほとんど休養が取れない状況であった。許されるのであればあと２名（生活移動介護者でスポーツマッサージができる者）の追加を希望したい。

2）コーチ体制

監　督　　中森邦男（全体の掌握と決定）
ヘッドコーチ　桜井誠一（監督のサポート）
コーチ　　富樫一行　柴田安秀　真井絵美子
トレーナー　　増田基嘉　（真井絵美子）
コーチ兼通訳　小西暢子

3）選手団本部との連携

入村時は、監督会議に出席し、本部役員や他の監督との意見交換ができ、細かい情報の入手が可能であったが、競技開催中は会議の出席もできない状況が続いた。水泳チームとしては、本部からの情報を収集するのみとなったが、必要な情報の日本語訳、水泳チームからの申し出などについて細やかな対応をしてくれた選手団本部に感謝したい。

3　競技運営

1）運　　営　水泳協会の競技役員、ボランティアの補助員、ＩＰＣからの技術委員、医療体制、ドーピングなどで構成されており、スケジュール通り非常にスムースに運営がされていた。しかも、大らかで暖かいまなざしで各選手団を見守ってくれた。

競技役員　オリンピックと同じ競技役員体制であたり、選手サイドにたった暖かい対応でしかもきびきびと行動していた。

補助員　選手の引率、会場係、会場入り口のチェックなど多岐にわたりボランティアが参加していた。年齢は２０から３０歳台は少なく、約８割は６０歳以上、中には８０歳近くに見えるボランティアで構成されていた。

ＩＰＣ委員　アン委員長を中心によくまとまり、ＩＰＣの規則にのっとり厳しく運営にかかわっていた。

その他　ドーピング委員、救急医療スタッフなど

2）会　　場　オリンピック会場を使用したが、選手の流れ、役員の配置、飲み物や氷の設置など選手サイドに立った会場の設営がされていた。特に困ることはなかった。

3）ボランティア　召集係から選手の引率を担当したボランティアには非常に感心させられた。毎日のように出会う選手、コーチに温かい心と言葉で分け隔てなく接してくれ、担当の選手にはレース後、賞賛あるいは励ましの言葉をかけてくれていた。彼らはパラリンピックを支えることに大きな誇りと自信を持ち、忙しい時でもスマイルとユーモアを忘れずにボランティアを楽しみながら参加していた。

4　その他

1）医療関係

水泳チームは、大会期間中に大会本部と会場の医療に世話になったケースは４回あり、救急車で運ばれたケースは３回になる。２回は同じ脳性麻痺の選手の全身硬直で、ハンドテクニックによる緊張緩和ができなくなり、選手村のクリニックに運ばれ筋の緊張緩和のために注射し

た。他の１回は全身の筋安定のためのステロイド剤の摂取が遅れたためでこれは選手の不注意が原因である。その他、選手が練習中に他の選手の頭部同士が衝突し、全身の震えと吐き気を訴えたために、水泳会場の医療にお世話になった。

日本選手団本部の医療チームには上記のほかに、風邪で２名がお世話になった。いずれにせよ、水泳チームは多くの人に支えられて大会を終了することができた。世話になった人には心から感謝する次第です。

２）現地のサポート

昨年参加したサザンクロス大会の時にお世話になったジャパンクラブの皆さんに今回もいろいろお世話になった。毎日差し入れのあったたくさんの「おにぎり」は、日本風の味付けの少ない選手村の食事と比べると、食が進み元気がよみがえるようで、非常にありがたかった。そして、毎日の日の丸を振っての応援は、水泳チームは大いに勇気付けられた。

また、最終日のショッピングのお付き合いなど気持ちよく応じていただき、選手も土地勘のある日本人からのサポートを得、有効に時間を使うことができた。特にリーダーの保坂夫妻には、毎日の連絡やこまごました申し出に気持ちよく応じていただき、いくら感謝しても足らないくらいであった。

５　アテネ大会に向けて

１）シドニー大会

選手決定と練習の過程は次のとおり。

選手決定まで

２０００．２．２０	日本身体障害者水泳連盟代表候補者決定
６．	日本代表選手決定
６．	エントリー種目の決定
７．１４	エントリー締切り

強化練習

２０００．４．７～４．９	宮城県	県総合運動公園　グランディ・２１
７．２０～７．２３	神戸市	東灘区自衛隊プール
８．１８～８．１９	大阪市	大阪プール
９．１４～９．１６	福岡市	県立総合プール

講義

トレーニング方法	コンディショニング
イメージトレーニング	オリンピック選手の体験談
アンチドーピング	競泳規則
練習と栄養	水分補給の仕方
マスコミについて	覚えておきたい英単語

２）シドニー大会参加上の留意点

参加枠　　シドニー大会は、国際ランキング１２位以内の選手数を参考に配分計算され各国に枠が与えられた。また、参加選手が少ないと予想された種目（クラス）については、競技成立のために、ワイルドカードでの出場を該当する国に打診があった。

知的障害の選手枠についてはアン委員長に確認し、０名と回答があった。

国際ランキングに記載されるためには、国際クラスの認定と、ランキング対象大会の出場が必要である。国際大会出場を希望する有力選手は、まず、海外のＩＰＣ公認大会に出場し、クラス認定を受けるが不可欠である。ランキング対象大会にはジャパンパラリンピックも含まれている。

エントリー　実際のエントリーは、期限内の国際ランキングに記載されている本人の記録が

標準記録をクリアしていることが条件になる。

クラス分け　ＰＰのクラス認定を受けている選手は、本大会でのクラス変更はないが、ＰＲ選手は変更の可能性がある。パラリンピック前にクラスをはっきりさせておくことが必要と考えられる。

ドーピング指定薬の服薬の提出

選手が服薬している薬がアンチドーピング指定薬の場合、所定の様式で大会本部に提出し承認される必要がある。

ドーピング対応

ドーピングを想定（特にメダル獲得の可能性のある選手）し、選手が服用している薬、サプリメントの使用目的、薬の番号などを英語のリストで携行させた。

3）アテネ大会に向けての強化計画

シドニーパラリンピックでは、結果的に満足できる結果を出すことができたが、レースごとにアナウンスされるワールドレコードは、参加選手の大幅な競技力向上を物語っている。

次回のパラリンピックでの成績向上を考えると、今まで以上の強化対策が要求され、今回のパラリンピック参加上の問題点を整理分析し、これからの４年間の計画的な強化が必要となってくる。

① 強化指定選手制度を改定し、国際大会参加を目標とする選手と将来可能性のある年齢の若い選手に限ることとする。強化指定選手には泳法、トレーニング理論、栄養とトップアスリートとしての心構えなどを身につけさせる。

ⅰ） 泳法

ストリームライン　　水泳中の基本姿勢
スカーリング　　水のかき方と手の平の角度
各泳法
スタート、ターン　　障害に応じ、またスピードに乗った技術の習得
ウォームアップとクーリングダウンの理解

ⅱ） トレーニング理論

トレーニングシステムの理解
年間及び週間スケジュールの立て方
ウエイトトレーニングの理解と実施
トレーニング、栄養と休養の関連

ⅲ） 栄養の取り方

水分補給
糖質、タンパク質、アミノ酸の役割とその摂取
その他の栄養素の持つ意味

ⅳ） その他

メンタルトレーニング
イメージトレーニング
オリンピック選手の体験談
アンチドーピング
競泳規則
マスコミについて
覚えておきたい英単語

② 日本身体障害者水泳連盟は毎年１回、国際大会に参加する。
強化指定選手は、アテネ大会の前年までに国際クラスの認定を受ける。

③ これから３年のうちに日本で国際大会を開催する。

④ これから３年のうち国際クラス分け委員を２名養成する。

⑤　プサンフェスピック大会とアテネパラリンピック大会のコーチを養成する。
⑥　強化合宿を１年間に２回実施する。アテネパラリンピックの年は４回実施する。
⑦　公的助成金へ予算申請をする。
⑧　プサンフェスピック大会とアテネパラリンピック大会に参加する水泳チームへの協賛企業を募集する。（ウエア、スイムゴーグル、サプリメント）

4）アテネ大会に向けての予算計画

①　合　宿　　単位千円

年	予　算	内　　容
２０００	６０８３	選手３０名　役員１５名　２回／年
２００２	６０８３	選手３０名　役員１５名　２回／年
２００３	６０８３	選手３０名　役員１５名　２回／年
２００４	７６０５	選手３０名　役員１５名　１回／年(3042)
		選手２０名　役員１０名　３回／年(4563)
計	２５８５４	

②　海外派遣　　単位千円

年　度	予　算	内　　容
２００１	な　し	
２００２	９６００	選手２０名　役員１０名
２００３	１８２００	選手３０名　役員１５名
２００４	な　し	
計	２７８００	

5）日本障害者スポーツ協会に期待すること

①　水泳連盟の現況について

協会傘下の競技団体で事務所を構え、専任職員を持っている団体はごくわずかで、水泳連盟を含めほとんどは、個人宅あるいは障害者スポーツセンターに事務所を置き、その運営に当たる会員（委員）は、自営業、会社員、公務員や団体職員で、その活動は無償（実費は基本的に支給）のボランティア活動である。

日本障害者水泳連盟の主な活動は水泳競技会の実施・協力（ＪＰ大会、日本選手権、６地域大会）、指導者養成研修会の開催、強化指定選手及び一般会員の強化合宿の開催、国際大会参加・派遣など多岐にわたっている。その運営資金は障害者スポーツ支援基金、中央競馬社会福祉財団などからの助成に頼っている。その活動は当水泳連盟の活動に賛同したボランティアに運営をお願いしているところである。

今回のシドニーパラリンピックでは、上記事業に加えて多量の実務が生じ、関係した役員コーチを中心に遂行した。

協会本部においては、日本の障害者スポーツの振興に関連する水泳連盟の活動について、その活動をよく審議いただき、日本を統括する協会の活動として位置付けできる活動について、障害者スポーツ支援基金又は他の予算の配分をお願いしたい。

②　国民の関心と競技団体の責任

長野パラリンピック以上に日本国民の関心がもたれたシドニーパラリンピックでは、大会前の合宿などを含め競技会場には数多くの報道陣が訪れ、選手団にＴＶなどの取材や諸々のコメントを求めた。その結果、多くの報道により長野パラリンピック以上に日本国内で盛り上がりを見せた。一方、競技団体（水泳チーム）の言動には大きな責任が生じることとなった。

日本身体障害者水泳連盟は日本の障害者スポーツ振興のため、基本的な姿勢として、選手個人の気持ちを尊重しながらも報道に協力した。しかし、報道からの依頼が多く、その依頼については水泳連盟任せになったことで一部監督やコーチに大きな負担となったことも事実である。

協会本部には、日本選手団として報道に対する基本的な考え方などの指針をお願いしたい。また、関係した報道に対する見返りとしての写真やＶＴＲの提供を各報道関係者に依頼できないであろうか。

③ ホームページなどの扱いについて

ＩＴ時代を迎え、選手自身のホームページが多く開設され、中には選手からのお土産まで出すページがあった。五輪憲章では選手のジャーナリスト行為の禁止が規定されており、オリンピック選手の多くは自粛していた。

また、選手が契約している企業などの広告についても、指針がない状況である。

今後、これらの分野での考え方の整理が必要であろう。

④ 一般競技団体からの指導者の関わりについて

今後、オリンピックとパラリンピックの協力、融合が進むと共に、国内の日本体育協会傘下の各競技団体との協力が進められていくと考えられる。一般競技団体指導者（コーチ）からの有力選手への指導の機会が増加すると予想される。障害の理解を伴わない指導の危険性について一般競技団体指導者に対する働きかけが望まれる。

⑤ アテネ大会に向けて

シドニー大会では、日本選手団が獲得した４１個のメダルの内１５個のメダルを水泳チームが獲得した。また金メダルは１３個の内９個を獲得、金メダリストは１２名中８名が水泳であった。今回のシドニーパラリンピックでは水泳チームは日本選手団の成績向上に大きな貢献をしたと考える。

しかし、従来からの障害者スポーツ支援基金による選手強化費の配分は、各競技団体を一律にした配分であり、障害者スポーツ支援基金の趣旨のひとつである日本の障害者スポーツの競技力向上に関連が少ないのが現状である。どの競技団体も競技力向上とメダル獲得を目指していると考えられるが、スポーツの世界は結果が重要な物差しになる。パラリンピックでの成績向上を考えるのであれば、実績を残した団体に厚く予算配分を残すべきであろう。一方、各競技団体により実績に対する評価は異なると考えるが、協会としてその競技の実態を把握した上で基準を明確にした評価をお願いしたい。

日本身体障害者水泳連盟はアテネに向け基本計画を立てたが、資金的な裏付けはこれからの課題とし、まずは障害者スポーツ支援基金からの配分を期待したい。

シドニーパラリンピックに参加して

ヘッドコーチ　　桜井　誠一

４年前のアトランタ大会にも参加させていただいた。

その時に世界の流れは、従来の「参加することに意義がある。」といった考えから、「競技として競い合う」という方向に確実に変化していることを感じた。帰国後に技術委員会として、①選手に国際経験を積ます。②強化選手の選定。③派遣選手による合宿。④ドーピング、健康管理、メンタル等の知識の習得。⑤リレーの組める選手選考。⑥コーチ以外の健康管理スタッフの派遣。などを提起させていただいた。

その後、日本身体障害者水泳連盟では、費用の問題、ボランティアで成り立っている連盟の実態を抱えながらも、今回のシドニーをにらんで、着実にこれらの課題を克服すべく、取り組んで来られた。今から考えても、この４年間の連盟の取り組みは、精力的であり、かつ世界の流れを読みきったすばらしいものであったと改めて思っている。会長始め各理事のご努力に感謝するとともに、今回その成果を作り、見る機会を与えていただいたことにお礼を申し上げたい。

成果とか結果というものは、そんなに簡単に出るものではない。しかし、今回のシドニーパラリンピックでは、結果論から言えば、幸運であったし、出来すぎたと思える結果であった。もちろん選手一人、一人の努力の結実ということもある。例えば、選手１７名のうち、個人種目で８位入賞または、ベスト記録の出なかった選手は２人のみであったことから見ても、各選手の大会に向けての練習とコンディショニング作りが成功したと言える。選手村に入った時期に、体調を崩す者もあったが、幸いにひどくならない状態で終えた。これなどは、選手村入りしてから、クラス分けなどの期間があり、大会までに時間があったことで救われている。

また、国際大会や昨年のサザンクロス大会でこのプールを経験している選手が多く、それも心理的にプラスに作用している。サザンクロス大会以降お世話になっている日本人クラブからのおにぎりの差し入れやアシストも、他の競技チームからうらやましがられた。アトランタを経験している選手の存在もチームのまとまりに貢献している。その選手たちは個人のレースでも、十分な力を発揮した。

ＳＢ３からＳＢ４へのクラス変更、さらに競技不成立のためＳＢ５での出場となった選手は、チャレンジ精神を忘れずに、黙々と練習に励む姿は、アスリートとして立派であった。

メダルの獲得という点から見れば、ほぼ予想どおりという結果であるが、内容的には予想と異なっている。プラスに働いたのは、視力選手のＢ３からＢ２へのクラス変更であった。障害が重くなっていることは、本人にとってショックであったと思うが、それを乗り越える結果を残した。すばらしい精神力である。また、リレー種目で金メダルを取れたのも大きい。反面、メダルにあと少しで届かず悔しい思いをした選手もいる。SB３男子の５０m平泳ぎ、S3 男子の自由形各種目、S6 女子の自由形各種目である。

これらは予測した３位入賞タイムで泳いだにもかかわらず４位の結果に終わった種目、予選のタイムで泳げていれば…という種目もあった。しかし、この結果は身体的な条件を考えれば、本当に良くやったと思っているし、悔しさは明日に繋がるものと信じている。S6 以上のクラスは、欧米人と日本人という一般的な体力差が厳しく、苦戦が予想されたが、そんな中でも、８位内入賞を果たした選手、ベスト記録を出した４人の選手はすばらしい、本当に８位内にあと一歩である。大会期間中、彼らは各国の選手の観察をも一生懸命行なっており、今後につなげようとする、そのたくましい姿勢に感心した。

レースの内容から価値ある一つは、視力の４００mメドレーリレーである。特に最終日のフィナーレを飾るのには最高であった。イギリスには勝てないとあきらめずに、１秒でも０．５秒でもタイムをあげる努力を怠らなかったことが勝利に結びついた。４人の執念を見たと同時にそれまでの疲れを吹き飛ばしてくれた。本当にたくましくなった日本チームの選手達。メダルというのは結果である。それよりもこの大きな舞台で、日本の水泳競技を目指す人達に希望を与えることが出来た今回の水泳選手達、そして、その選手達を支えることが出来た喜びは、コーチ冥利につきるといっても過言では

ない。

今回の監督、コーチ陣７人の構成はたとえ競技の結果が悪い結果に終わっていたとしても、心から良かったと言えるメンバーであった。監督・コーチの２人で何もかもが求められたアトランタと違って、その精神的、肉体的負担は数段異なったし、数々の困難にも、お互いが助け合い、役割をうまく果たせたと思っている。また、自分のレースが終了したある選手には、他の選手の手助けや他国の選手との交流のお手伝いをしていただいた。うまくチームのムード作りを企画するなど、その機知にとんだ働きに感謝したい。選手団本部の役員、医師団にもお世話になった。水泳競技の選手は他の競技に比べても重度な障害者が多いし、体調不良、アクシデントなど難しいケースもあった。そんな時、医師団には適切なアドバイスや治療をいただき、レースを棄権する勇気を選手に与えていただいた。

帰国後驚いたことにマスコミの報道の多さとその影響がある。長野の冬季大会以降、障害者のスポーツについては報道が増えていたり、事前の取材がかなりあったり、予測はされていたものの、本当にびっくりである。今後の課題としてあげるならば、このマスコミへの対応を一番に挙げておきたい。一口にマスコミといっても、新聞、雑誌、テレビなどそれぞれに取材のスタイルが違うし、取材に訪れる記者も、その社そのものの所属の人、下請けの人、フリーライターと呼ばれる人など様々である。新聞では、社会面、運動面、文化福祉面と紙面によって物事の見方、捉え方が異なる。テレビでも、ニュースと、ワイドショー、ドキュメントなど企画番組とまったく異なった作りかたをする。これらの違いや取材にくる人の持っている知識などによって、同じ話をしても捕らえ方が異なり、「こんなことは言っていない」「意図と違う記事だ」などトラブルと混乱の原因になっていく。それだけに、無防備な発言や冗談は、間違ってとられ、それが流布すると人の運命まで左右する。

また、マスコミへの露出度とともに出てくるプラス面とマイナス面をしっかりと考えておかなければならない。マスコミに登場する取材された自分というものは、ある一面にしか過ぎない。それでも、その記事を読んだり、テレビで見た人は、それがその人物のすべてであるかのように捉えてしまう。虚像の世界である。その虚像や人々の勝手な期待が壊れた時、いわゆる「パッシング」ということが起こったりする。これは、水泳でなく他の競技者の話であるが、シドニーに行くまでは、メダル候補と言われ、取材も多く、それに伴って、応援してくれる人々が増え、盛大な壮行会まで行われた。しかし、結果は振るわず、予選も通過できなかった。帰国後は取材も無く、友人など周囲の人々の目も冷たく写った。その結果、「成績の悪かったのは大会会場が選手村から遠く、自分達の障害に十分な条件が用意されなかったからだ」「一緒にいったコーチが悪かった」「他の競技団体のような事前の研修合宿や十分なサポートもなかった」といった発言があったと言う。その発言を聞いたマスコミの一人は「障害者のスポーツ選手は、まだこのレベルですか。これでは、オリンピックと同じにとは主張できませんね。」と一言つぶやいたと言う。このマスコミは新聞系であったから、このような評価で終わっている。これが、週刊誌など雑誌系なら「悪かった選手環境」、「選手とコーチの確執」、「お粗末な支援体制」、「意識の低いパラリンピック選手」とかの見出しが躍ることになったかもしれない。

他にも、今後の課題は多くある。

１、一般的な競泳指導者に対する障害者のスポーツへの理解と研修の機会増
２、ヨーロッパ選手権などを開催している国々の実情調査
３、医師や心理士との連携強化
４、強化指定選手制度の見直し（年齢要件や地域連盟推薦枠の創設）
５、大会現地への先行合宿や先遣隊の派遣

等々である。

多くの課題があって、解決に向けて取り組みたいと思っても、資金の問題や献身的なボランティアで成り立っている連盟にとっては困難なことも多いと思う。

しかし、パラリンピックの期間中、伴に過ごした選手達ともう一度４年後に感動を味わうために、「ＪＳＦＤ，にっぽんＮＯ１」をともに叫ぶために努力しようではないか。

シドニーパラリンピック感想

コーチ　　冨築　一行

１０月１８日から２９日の間開催されたシドニーパラリンピックでは、日本選手団水泳競技の１７名の選手が世界のトップ選手と熱い戦いをしました。

今世紀最大の規模で開催されたパラリンピック（シドニー２０００）ではＴＶではＮＨＫを中心にほぼリアルタイムで報道されたこと、新聞各社も競って報道されてことで、長野パラリンピックと同様に強烈な印象を与えていたようです。帰国後、報道の加熱ぶりを聞かされ、障害者スポーツの新しい時代の幕開けを感じました。

水泳では、今大会から男女のリレーを組み大会に臨みました。結果、女子の２０ポイント（機能障害）と男子のＳ１１～１３のクラス（視覚障害）で一個づつ金メダルを獲得したこと。また、全体では金９個、銀５個、銅１個、合計15個のメダルを獲得できたことは大きな成果だったと思います。しかし、その反面今後の課題として、連盟サイドとして強化指定選手のみならず全体のレベルアップの必要性が感じられました。

ここでは水泳競技として全体的な所感・課題と個人的な所感について述べたいと思います。

＜全体的な所感＞　今回、初めてパラリンピックに参加してまず感じたことは、歴然とした世界との差であり、リハビリテーションの延長としたスポーツではなく、明らかな競技スポーツとしてパラリンピックは確立していることでした。世界に立ち向かうには、地域での強化をよりいっそう段階に応じて実施していく必要性や各団体との連携を実施していくことの重要性を感じました。

＜課題＞
① 選手の事前（担当の選手）掌握が、どうしても地域の選手になり偏ってしまった。
② 国内でのトップレベルの大会（ジャパンパラリンピック）では、ルールについて健常者と「同じぐらい厳しい」ではなく、「より厳しい」にし、日本選手権との試合の位置づけを明確に区分して、選手の意識と大会の趣旨をよりいっそう啓蒙する必要性を感じる。
③ 技術委員の中に、一般の水泳の強化コーチをオブザーバーなりで導入（理解がある人が前提になるが）し、障害担当技術委員（今の技術委員にあたる）と技術向上ため、コンセンサスをしていくことがこれから色々な意味で重要となるように思う。
④ スイミングクラブや学校との連携。

＜個人的な所感＞　この大会で水泳連盟強化指定選手合宿以外にもＢ１クラスの河合選手のタッピングを指名されたことから、静岡に３回、中部大会に１回行くことになりました。私個人としては、マン・ツー・マンで河合選手に接することで色々なことを学び、良い経験になりました。私自身河合選手とは４年前のアトランタの強化合宿から顔見知りでしたが、指導している班が異なっていて直接選手とコーチという立場で接したのは今回が初めてでした。（もっとも一般的にいうコーチと選手という立場ではないが・・・・）

今回はマスコミ関係の取材も多く、私の中では当初、それ故にプレッシャーも大きく、非常に重い合図棒になりましたが、強化合宿を含め幾度もタイミングを合わせることで、呼吸も合い、本番では結果として最終種目である５０ｍ自由形で優勝しましたので正直「ほっ！」としました。タッピングを通じて障害者の水泳指導の奥深さをあらためて感じ、今後の水泳指導に対しても自信が持てたと思います。

以上、今大会に参加させて頂いたことは私にとって大きな節目となると思います。それは、ほんとうに色々な方にお世話になり、こんなすばらしい大会に参加できていることを幸せに感じました。私達は、このことをよく噛み締め、今後、この経験を生かし日本身体障害者水泳連盟、障害者スポーツに貢献していくのが責務だと感じます。

最後になりましたが、このような機会を与えて下さいました、日本身体障害者水泳連盟の会長をはじめ、関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

シドニーパラリンピックに参加して

コーチ　　柴田　安秀

電光掲示板を見て、１位の場所にＪＡＰＡＮとワールドレコードの文字、男子ブラインド４００ｍメドレーリレーで、日本チームは優勝した。と同時に日本パラリンピック水泳チーム全てのレースが終了した。

思い起こせば、強化指定選手制度ができ、また、パラリンピック出場選手が確定して数々の合宿や大会また、時には、コーチが出向いたり選手が来館しての練習そしてタッピング練習。それと共にチームの団結力もより深まったように感じた。合宿などは選手にとってもコーチ役員陣にとっても仕事やその他で、時間的にも大変厳しい。しかし、合宿のおかげで一人一人の意識向上や、チームとしての団結力は確実に良い方向に向いたと思う。また、コーチのついていない選手にとっては練習の仕方やその時の状態や泳ぎを確認するためにも必要であったと思う。

私自身にもタッピング練習やその他、勉強になったことがたくさんあった。今回、中條選手のタッピングの担当になって、数多くの練習を積み重ねてきた。また、ジャパンパラリンピックや日本選手権大会においてレース時のタッピング練習もできた。特に中條選手の場合には練習の時の泳ぎとレースでの泳ぎが全く違ってしまうため、この２つのレースは大変貴重な本番のための練習となった。両大会とも練習の時の泳ぎとの差を感じなく合図したため、自分の、また中條選手にとっても納得のいくタッピングになっていなかったと思う。中條選手とその後も何度か２人で練習を積み重ねてきた。そして、パラリンピック本番、ほぼ１００％に近いタイミング、大成功であった。私の胃の痛みも大分治まった。パラリンピック出発前、おそらく精神的なことと疲労ではあると思うが、胃痛におそわれて集合日に病院で点滴を打ってから集合した。原因の一つは中條選手のタッピングが成功するのかの心配があったように思う。そして、もう一つに奈良選手の筋緊張があった。日本選手権大会後突然の筋緊張、１０日ぐらいの寝たきり状態、その後も、シャワーを浴びて緊張、水に足をつけて緊張というような状態であった。集合日前日までには何とか泳げる状態までには持って行った。何度か出場を辞退させようかと思ったがその話を出すとより緊張が強くなるので何とかごまかしながら練習を続ける状態であった。集合してから特にシドニーに着いてからは他の選手の事もあり、また私の顔を見ると頑張らなくては申し訳ないという気持ちがあるようで、より緊張が入ることが見られため真井コーチと増田コーチに任せきりになってしまい、大変な思いをさせてしまい申し訳なく思っている。今でも大会前に辞退させた方が良かったのか、出場させて正解だったのか良くわからないが、彼女にとっては、パラリンピックに出場できリレーで力を合わせて金メダルを取れたことが、自信と誇りになっているようである。

大変なこともあったシドニーパラリンピックであったが、成田選手の金メダルから始まり、女子リレーでの金メダル、そして、ブラインドリレーでの接戦での金メダル獲得と感動もたくさんあった。特にブラインドリレーの後は、喜びと充実感で全身の力が抜けるようであった。世界選手権大会とフェスピックにも行かせていただいたが、それ以上のものを選手・役員の意気込み、大会の運営、日本人応援団などで感じることができ、このシドニーパラリンピックに日本選手団の一員として参加できたことを大変喜ばしく思うと共に、推薦していただいた水泳連盟の方々に大変感謝している。ありがとうございました。

シドニーパラリンピックに参加して

コーチ　小西　暢子

一昨年の世界障害者水泳選手権大会、昨年のサザンクロス大会に続いて、今回のシドニーパラリンピック大会にスタッフとして参加させていただきました。今回のパラリンピックは、ハード面でいくつかの問題があったものの、水泳競技の運営面では、私の知る限りではほぼ完璧なものであったと思います。今回のような素晴らしい舞台で泳ぐことができたことを、選手は幸せに感じたことだろうと思います。

私の語学力で可能な範囲での通訳・翻訳業務も担当させていただいたことから、大会期間中に数回にわたって開催されたＩＰＣ水泳部門総会や監督会議に出席する機会がありました。前述の世界障害者水泳選手権大会でも、そのような流れは十分に感じ取ることができましたが、パラリンピックを最高峰の大会として、障害者の水泳が、競技スポーツ、エリートスポーツとして進んでいく方向を強く示していたと、今回の大会では、よりいっそうはっきりと感じました。今後も、この方向性が変わることはないと思われますが、日本代表チームと国内の活動について、競技スポーツとしての真の意味での確立、発展には、まだまだ課題が多いと感じました。オリンピックと比して歴史も浅く、研究活動なども少ない障害者水泳ですので、当然といえばそれまでですが、今一度、課題の分析、対策・展望の検討が必要であると思いました。そのうえで、国際大会へ継続的に参加し、より多くの経験を積み、選手・スタッフともに、国内での活動や事前準備を含め、国際大会における様々な対応能力を向上させていかなければならないと思います。

今回、日本代表チームは、前回のアトランタ大会を大きく上回る選手・スタッフ数で参加することができ、素晴らしい成績をあげることができました。これも、それぞれの選手の日々の努力が実った結果であると思います。長期間にわたり、様々なプレッシャーや試練のなかで、努力を続けた成果であったのだろうと思います。競技としての成り立ちはまだ歴史も浅く、これからいっそう発展していく世界のなかで、「競技者」としての強さ・柔軟性という観点においてのさらなる成長・成熟に期待したいと思います。環境の変化のなかでの「自律」は、どんな競技者でも難しい部分ですが、パラリンピックで戦う選手であるという誇りを持ち、この点において、より成熟したアスリートをめざしてほしいと思います。「競技者としての経験」が大きく影響する部分ですが、今までと同様、継続は力なりだと信じます。

水泳のスタッフは７名で、それぞれの役割にベストを尽くしましたが、17名の選手のスケジュールに必要なサポートを考えると、常に余裕のない状況で動くことになり、予想外のアクシデントへの対応を併せると、ケアが手薄になってしまう点もあったのではないかと思います。選手同様、チームとしてのさらなる成長・成熟の必要性を強く感じました。個々の選手のスケジュールと必要なサポートの時間的・物理的配分は非常に難しいものがあったと感じます。しかし、IPC の方針では、今後もスタッフの人数が大きく増えることはないように思われます。スタッフとして、国際大会の経験をさらに積み、できる最大限のサポートを円滑に遂行していく能力が必要だと思います。各々の大会により、条件や制約が必ずありますが、その範囲のなかで、様々な課題を克服していくことができるよう、今回の経験を細部までしっかりと次回につなげていくようにしなければならないと思います。

私自身としては、現場での選手への対応と種々の文書関係業務や情報収集等の、時間の配分の調整に難しさを感じました。余裕のなさから、チームに負担をかけた面があったのではないかと思います。チームの動きは競技を最優先していくことが当然ですが、並行して、時間の指定・制約のある中で事を決定し、文書等を作成していかなければなりません。今回は、書類の不備などのミスは避けることができましたが、より円滑に動きをとれるような工夫や語学力を含めた対応能力のいっそうの向上が必要であると感じました。

チーム全体としては、簡単な英会話能力を向上させる必要を感じました。国際大会に参加するごとに選手・スタッフのコミュニケーション能力は向上してきていると思いますが、競技に関して、また

大会期間中の生活面において、さらには他国の選手との交流に関して、簡単な意思疎通ができる程度の語学力は身につける必要があると思います。

他競技での抗議で「言葉の障壁を感じた」ケースがあった、ということを聞きました。幸い水泳では、抗議にいたるようなケースは今回ありませんでしたが、あらゆる場面において、いつ何があるかはわかりません。通訳が必要かどうかなどを含め、何がどうなっているのかを自分で判断できるような対応能力のひとつとして、英語でのコミュニケーション能力の向上が必要であると感じます。簡単な意思疎通ができる程度の語学力で充分であると思います。一朝一夕に身につくものではありませんが、一度身につけば、あらゆる場面で、自分の身の回りやチーム全体がより円滑に機能するなど、安心感が得られ、心強い武器となります。

パフォーマンスへの影響については個人差がある部分ですが、競技者としての自分を自己分析する際に、一要素として考える必要があると思います。大会期間中は、想像を超えるであろう様々な重圧のなかでレースに挑む選手の姿に励まされる毎日でした。個々に目標や思いをもっての大会であったと思いますが、得られた結果や思いから、新たな課題もしっかりとつかんだことだろうと思います。

また、国内の合宿等では見ることのできない一面も見ることができました。河合、成田両キャプテンを軸に、これまでの遠征にはない雰囲気も経験することができました。チームとしての課題もしっかりと認識し、今回このチームでの貴重な経験のすべてを、様々な視点から考察し、今後の糧としていくことができるよう努力していきたいと思います。

最後になりましたが、このような機会を与えていただいたことと、協力してくださった多くの方々、チームの皆さんに心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

シドニーパラリンピックに参加して

コーチ　　眞井　絵美子

昨年、同時期に開催されたサザンクロク大会の際には、私の経験不足から体調を崩した選手のケアの際に誰がいちばん手当てが必要であり、とりあえず待っていられるのは誰なのかなど、あまり考えずにただただバタバタと走り回り、不要に疲労し、選手の皆様からかえって心配されるような場面が多々あったことを深く反省しました。

今回のシドニーパラリンピック参加にあたり、アクシデントがないに越したことはないのですが、やはり人間……ましてや３週間と長い期間での遠征です。想像のつくアクシデント、そして誰も思いもつかないアクシデントが起こるであろうそんな時、冷静に何がいちばん大切でやらなければならないことか、「優先順位！」を混乱に惑わされず冷静に判断することを私は常に頭に置いて行動しなければと思っていました。

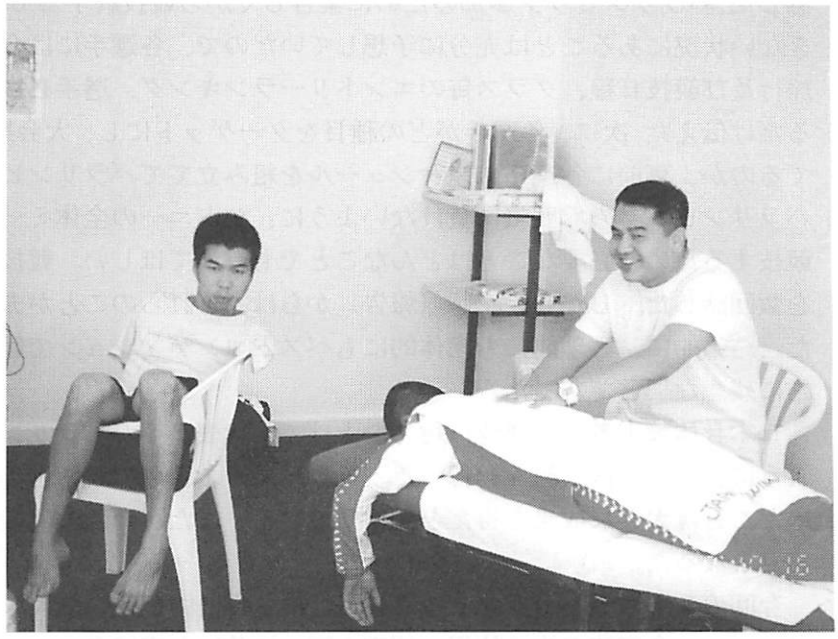
現地でも、常にそれを頭に置いていたつもりでしたが、やはり想像を超えるアクシデントに優先順位選択の判断力を失い、結果的に夜遅くまで選手の要望に答えられなかったり、翌日にまわしてしまうことも多々あり、私的には当初の目標をクリアすることができなかったように思われ、今後の課題が残りました。また、水泳選手は他の競技に比べ、水に入るというリスクとそれに伴なう体温調節の関係上、物理的にも生理的にも風邪を引きやすいといわれています（詳しくはよく分かっていない？）。実際に、昨年のサザンクロク大会（天候など物理的なことも多かったが…）と今回のパラリンピック大会において、水泳選手には特に風邪・発熱の症状を生じた選手が多かったことに今後、更に調査を行い、対応・予防を考えなければならないと思いました。

最後に、精神的・肉体的・物理的にも厳しい条件の中、レースに望む選手の姿を見ることができたこと、そしてひとつ屋根の下で生活し、その中から２～３泊の合宿や国内のレースでは見ることのできない選手の姿など、様々な角度で選手やスタッフと接することができたことは私にとって大変貴重な経験でした。本当にありがとうございました。今回のような長期間での遠征は当分の間ないとは思いますが、反省点・良い点も含め、この経験を選手・スタッフ共々次の大会へ、そして自分自身に引き継いでい行くことが大切なのではないかと思います。

本当にお疲れ様でした　☆

シドニーパラリンピック報告

コーチ　　増田　基嘉



シドニーパラリンピックでは、主にクラス分けと選手のコンディショニングを担当させていただきました。担当コーチとしての業務は、以下の通りです。

① 出場選手のクラス分けに関する資料の準備と現地での対応
（実施件数２名の内１名に対応）
② 選手の使用薬物の調査と申請書類の準備
③ 選手の体調面での情報収集とコンディショニングの実務
④ 選手の栄養摂取状態の把握と指導
⑤ 大会会場での荷物管理

昨年度の合宿から選手のスポーツ傷害の発生状況について合宿毎に情報収集や対応を行ってきたために現地でのコンディショニング業務は、内容は不十分であったものの国内合宿と同様の対応が可能でありました。

但し、私の技量不足や時間配分のミスから選手の休息時間への配慮が足りなかったように思われます。例えば深夜までマッサージを行うなど改善すべき課題がありました。また、選手から「強い選手から優先して行われているのか」との質問をいただくような場面もあり、選手の要請への対応のまずさを感じることがありました。競技期間では、競技スケジュールを優先した対応を心掛けたつもりではありましたが、実際のニーズに対処できていたかは疑問の残るところであります。また、長期間の遠征で練習不足となる選手もいたのではないでしょうか。日頃から単に泳ぐだけでないウェイトトレーニングなど補助的なトレーニングを行っていた選手が多かったことを把握していましたが、実際は数人選手がチューブトレーニングを自己管理の中で行っているにとどまっていました。選手村内のトレーニング施設などの積極的な利用も事前に計画しておけば良かったかもしれません。

その他、日常の栄養摂取に対する意識づけを行うために個人ファイルを作成しましたが、多くの選手が選手自身がコンディショニングの一環として記録を行うことができた点は評価できるように思われます。但し、帯同にあたり一般的なスポーツ栄養学の知識を準備してはいましたが、実際の食堂のメニューを見て適切な指導が行えればさらに有効なものとなったと思われます。今回は、日本人会の皆さまのサポートと比較的我々の口に合う食事内容であったため大きな問題とはなりませんでしたが、今後の遠征では十分な対応能力が課題となるように思われます。

最後に、パラリンピックという競技の世界において、選手達が肉体的にも精神的にもハードな環境で活躍している姿を間近で見ることができたことに大きな喜びを感じ、また多くの反省点を持ちました。競泳を全く知らない者として傍観者的立場で、選手、コーチ達と十分なコミュニケーションがとれぬままの３週間ではありましたが、有意義な経験をさせていただいたように思います。今後の日本の障害者水泳の更なるレベルアップを期待し、この経験を次の大会へと引き継いでいくことが私の責務と考えています。本当にありがとうございました。

以上、パラリンピック報告とさせていただきます。

編　集　後　記

監督　　中森　　邦男

選手、コーチの感想（報告）を読んで、多くの人間が長期にわたって団体行動をする時の難しさを痛感した。パラリンピック参加のために集合してから競技終了まで、選手、コーチと充分に意見交換ができない状況にあることは充分に予想していたので、各選手には合宿時及びニュースレターにおいて、旅行及び競技日程、クラス毎のエントリーランキング、選手必携、選手村情報など必要な情報はできるだけ伝えた。次に、各選手がどの種目をターゲットにし、大会期間中にそのための練習をどう組み立てるのか、事前に各選手にスケジュールを組み立ててパラリンピックに臨むように指示した。また、パラリンピックの雰囲気に負けないように、シドニーの全体ミーテイングにおいて「ベストの状態で競技するために必要なことはどんなことでも言ってほしい。競技を第一に考えている。」と言う内容を数回話した。しかし、感想（報告）からは、これらのことが充分に理解されていないことがわかった。結果的に、心理的にも肉体的にもベストコンディションで競技できなかった選手が出たことは非常に残念なことであった。

日本身体障害者水泳連盟は総力を上げて、代表選手がパラリンピックにおいてベストで競技できるように、多くの取り組みを行った。その結果、１７名の競泳選手中８名の胸に、ゴールドメダルが輝いたことは大きな成果を得たと確信している。また、今回の実績は日本身体障害者水泳連盟の大きな誇りとなった。

今回のシドニーパラリンピックには、物品の提供を戴いた大塚製薬、味の素株式会社、山本工学（スワンズ）、合宿時の施設使用で便宜を図って戴いた宮城県立総合運動公園、海上自衛隊阪神基地隊、大阪プール、大阪市舞洲障害者スポーツセンター、福岡県立総合プール、シドニー滞在中に昼食を始め多くの協力を賜ったリーダーの保坂夫妻を始めとするジャパンクラブのみなさん、長期にわたるコーチの派遣のご理解いただいた神戸市、大阪府、大阪市舞洲障害者スポーツセンター、群馬県ゆうあい記念プール、日本リハビリテーション学院、東京都障害者総合スポーツセンターなど多くの関係各位にお世話になりました。シドニーパラリンピック水泳チームを陰で支えていただいたこれらの関係各位には、心からの感謝を申し上げる次第です。

日本身体障害者水泳連盟は次のアテネパラリンピックに向けて、今回の反省を活かしながら第一歩を踏み出しております。これからも多くの方々に支えられていることを自覚し、感謝しながら、さらに競技力の向上を目指していきたいと思います。

水泳チーム名簿

No.		氏　名	性別	住　所
1	監　督	中森　邦男	男	埼玉県　宮代町
2	ヘッドコーチ	桜井　誠一	男	神戸市　西区
3	コーチ	富築　一行	男	大阪府　堺市
4	コーチ　通訳	小西　暢子	女	大阪府　豊中市
5	コーチ　トレーナー	増田　基嘉	男	大阪府　羽曳野市
6	コーチ	柴田　安秀	男	群馬県　前橋市
7	コーチ	真井絵美子	女	東京都　世田谷区
1	選　手　視覚障害	河合　純一	男	静岡県　舞坂町
2	選　手　視覚障害	中條　泰治	男	東京都　渋谷区
3	選　手　視覚障害	杉田好士郎	男	千葉市　美浜区
4	選　手　視覚障害	酒井　善和	男	神戸市　北区
5	選　手　脊髄損傷	成田真由美	女	川崎市　多摩区
6	選　手　脳性麻痺	梶原　紀子	女	福岡市　中央区
7	選　手　脊髄損傷	加藤　作子	女	兵庫県　伊丹市
8	選　手　機能障害	藤田多佳子	女	神戸市　須磨区
9	選　手　脳性麻痺	奈良恵里加	女	群馬県　前橋市
10	選　手　脳性麻痺	井上　八郎	男	埼玉県　川口市
11	選　手　脊髄損傷	軽部　弘	男	茨城県　つくば市
12	選　手　脊髄損傷	前田　大介	男	長野県　松川市
13	選　手　脊髄損傷	浜村　敏弘	男	島根県　出雲市
14	選　手　機能障害	宮本　圭	男	大阪府　守口市
15	選　手　脊髄損傷	細川　宏	男	三重県　海山町
16	選　手　機能障害	荒　力	男	大分県　日出町
17	選　手　切　断	本村　洋介	男	埼玉県　狭山市
18	選　手　視覚障害	陳　豊春	男	神戸市　中央区

シドニーパラリンピック
報　告　書

発　行　日　　平成１３年７月１５日
編集責任者　　中森　邦男
発　行　所　　日本身体障害者水泳連盟
０６－６４６５－８１００
（大阪市舞洲障害者スポーツセンター内）